



発行・編集 財団法人岡本国際奨学交流財団 263-0023 千葉市稲毛区緑町1丁目19番11号 TEL043-248-8808 FAX043-238-4138
osf-midorii1911@cods.ocn.ne.jp http://www.osf-family.com

OSF(Okamoto Scholarship Foundation)の活動案内 1、留学生宿舍の運営 2、留学生へ奨学金の支給 3、留学生の学習&人生相談・国際交流

OSFが活動を始めて20年。その間、多くの優秀な学生を輩出してきました。皆さんの近況報告をこの欄で紹介していきたいと思ひます。

松井 瞳 (H4 中国、奨学生)

上海第二医科大学医学部にいたころ中国では所謂天安門事件が勃発し、世情騒然とした中、両親の勧めと既に日本に留学していた姉の招きで日本留学を決意しました。姉の所へ身を寄せてまずは日本語学校へ通い日本語習得に励みました。

その後、日本大学薬学部への入学が許され入学。直ぐに先生からOSFを紹介されて奨学金を頂くことになりました。OSFでは奨学金はもとより、留学生に必要と思われる多岐にわたる援助プログラムがあり留学生間の交流を重視されていました。

薬学部二年目になり、大学の特待生奨学金を頂けることになりOSFの奨学金を辞退いたすことにしました。しかし、OSFでの各種プログラムには、慣れない日本での学生生活に必要な援助提供があり、岡本家の皆さん総出で留学生への援助に取り組んで居られて感銘を受けました。岡本家の皆さんと20年後の今もお付き合いさせていただけるのは本当にありがたく思っております。このような財団を残された亡き岡本正会長に心より尊敬と感謝を感じ続けております。いつの日か私も中国人留学生に限らず、日本での勉学に励む留学生への後援の出来る活動を始められたらとの夢を持っております。

息子の大学進学が決まりホッとした昨今、中国での先端医療、特にリハビリと介護施設の充実に目を向け日本からの技術移転への呼びかけが増加いたしております。官民を挙げてこの傾向は日本に劣らず高齢化の進む中国、とりわけ富裕層の高齢化に伴う医療の充実に目が向けられており、微力ながら協力を始めております。今後は一層この二国間協力の動きに拍車がかかるものと考えて協力していきたいと考えております。

若く日本へ留学を果たした皆さんには、勉強の大切さとはもとより勉強結果を一層幅広く生かしていくための自分なりの未来図を持ちつつ視野を広く持ちながら勉学に励

んでもらいたいと思ひます。アジア諸国の国境の壁は以前に比べてより低くなりつつあります。

岡本国際奨学交流財団は故岡本正会長の慈愛の心で設立されたと伺っております。若き留学生の皆さんとOBの皆さんが高い理想を求めて集うことがその設立の趣意であると信じております。



李 勇 (H15 中国、奨学生)

浙江工業大学芸術学院 (博士 准教授)

梁春慧(奥さん): 浙江工業大学図書館講師

近況報告

私は2009年3月に卒業してから、浙江工業大学芸術学院に勤めています。妻は同大学の図書館で勤めています(写真の建物は図書館です)。杭州は風光明媚な古都、優良観光都市です。その美しさは、古くから多くの詩にうたわれ、絵にも描かれました。西湖、靈隠寺、岳王廟、六和塔など数えられないほどのスポットがあります。西湖散策はよく私たちの週末活動になります。

もちろん、西湖はいくら美しくても、私たち夫婦を千葉の皆さんと岡本財団のことを忘れさせないです。日本に留学した8年間、岡本財団だけでなく、日本の皆さんから大変お世話になりました。日本の留学生生活は私たちの一生の貴重な思い出と宝物になります。

帰国後、母校の千葉大学と現在勤めている浙江工業大学が姉妹校になることに微力を尽くすことができ、大変嬉しかったです。これからも中日の学术交流の架け橋になれば何より嬉しいことです。



OBの皆さん、原稿を募集しています。また、これから無作為で原稿をお願いしていきますので、ご協力ください。

4月29日、設立当時に理事として財団運営に協力して下さった神戸正さんが逝去されました。ご冥福をお祈り致します。

南房総旅行

- ◎ 5月12,13日、奨学生旅行に行く。
 今年は東京湾に浮かぶ「海ほたる」で
 昼食をとった。
 曇りがちの天気だったが、
 海の壮大さを存分に楽しんだ。



姜霞さん

秦穎潔さん



付照君さん



郭炳宏さん



デリパールさん

OB 来訪

- ◎ 4月18日、郭炳宏さん(H7 会館生、台湾)が来団。
 彼は台中の東海大学の教授として活躍している。
- ◎ 5月13日、ヒューさん夫妻(H8 奨学生、ベトナム)が出張で来日し、顔を見せてくれた。
- ◎ 5月31日、李勇さん(H15 奨学生、中国)が来訪してくれた。
 杭州の大学の先生で、力を発揮している。
 奥さんは今妊娠中。丈夫な赤ちゃんが生まれますように・・・
- ◎ 6月1日、胡祖耀さん(H7 奨学生、中国)と松井瞳さん(H4 奨学生、中国)が来訪してくれた。昔幼かった息子さんたちは、それぞれ優秀な大学生。楽しみですね。
- ◎ 6月10日、付照君さん(H5 奨学生、中国)が出張で来訪。今深センの企業で活躍している。
- ◎ 6月16日、李娜さん(H19 奨学生、中国)が来団してくれた。マツダに勤めていて、広島暮らし。毎年広島旅行の際には彼女の世話になっている。
- ◎ 6月19日、デリパールさん(H12 奨学生、ウイグル自治区)が娘さんを連れて来団。娘さんも大きくなった。
- ◎ 6月25日、秦穎潔さん(H15 奨学生、中国)が来団。母国では大学の先生として、忙しい毎日だそうです。
- ◎ 7月4日、陳漢さん(H16 奨学生、中国)が来団。
 8月2日から船橋で個展を開くそうだ。

OB 消息

- ◎ 7月9日、デラさん(H19 会館生、インドネシア)とマイさん(H18 会館生、ベトナム)夫妻に
 女の赤ちゃん誕生。
- ◎ 6月9日、李 鍾啓さん(H15 会館生、韓国)に男の子誕生。どちらも無事に出産出来てよかったね!!
- ◎ 4月28日に、姜霞さん(H24 奨学生、中国)が故郷で結婚式を挙げた。写真のとおりステキなカップルですね、オメデトー!!

「スイカ」マラソン挑戦!



- ◎ 6月24日、富里市の「スイカマラソン」に OSF 代表の6名が参加。10キロを全員が完走した。応援団もたくさん集まり、声をからして応援した。スイカの食べ放題に大満足!!
- ◎ 7月8日、会館生 OB 会があった。子供の数も増えてにぎやかになった。中国から会館1期生の OB、景平さんも来日して参加してくれた。



役員会



6月6日、役員会が開かれる。
 会議後のパーティーでは、留学生のお料理もたくさんでなごやかな会となった。

ヘイン・ソピィー（会館生） カンボジア

千葉大学

専攻科目の選考理由と将来の目標について

私は2008年に文部科学省の奨学金を受けて来日しました。現在、千葉大学法経学部・経済学科で、経営学を専門に学んでいます。

この専攻を選んだ理由は、主に二つ挙げられます。最初の理由は、子供の時から持っていた自分の夢を叶えたかったからです。これは、自分が住んでいる環境の影響を受けて興味を持つようになったのではないかと思います。私は小さい頃から、家庭の経済はまだ大変だったので、両親がこの大きな家族の全員を支えるために小さな零細企業を二人だけで運営するのを見て、非常に手伝いたいという気持ちがありました。それなのに、自分がまだ小さかったので、仕方がなく立って見ていること以外、何も手伝えなかったのです。でも、その気持ちはずっと持ってきました。「これから勉強を頑張って、大きくなって親を手伝えるようにしたい」。そのため、ビジネスに関連する科目などを考え始め、興味も持ってきたのです。

この気持ちを大きくなくても忘れないで、知識を広げていった上、夢をもっと拡張してきました。世界の国々の政治・経済、歴史などを通じて、国々の政治経済の変化などにとっても興味を持ち、特に、第二次世界大戦の後、日本の経済成長するスピー



にはとても驚かされました。短い時間しか経っていなかったのに、日本の経済は敗戦から急速に復活しただけでなく、どんどん発展してきたことが分かりました。素晴らしい日本の国に比べ、母国はどんなに小さくて、どんなに弱いか分かってしまいました。発展途上国のカンボジアは、天然資源に富むと言われていたのに、資源を上手く利用し、国の経済を上手く経営する人的資源が本当に足りないことは明らかです。そこで、家族だけでなく国のためにも役に立つ人になりたいです。母国を日本のように発展させたい、日本人のように国の発展に貢献したい、という希望まで出てきました。自分の知識・能力の限界、また、興味などに基づいて、国に貢献出来るようになるためには、まず経営学や経済学の知識を得たり広めたりして、その分野から貢献できればと考えました。

以上の理由にも述べてありましたが、これらは私の将来の目標でもあります。また、日本に留学したからこそ、日本が大好きになっていて、将来、カンボジアと日本の掛け橋となるようになりたいです。卒業してカンボジアに帰っても、日本に関係ある会社などを作ったり勤めたりしたいです。将来のために、これから勉強をもっと頑張りたいと思います。

ジルモト（奨学生）

中国・内モンゴル

千葉大学 工学研究科 デザイン科学専攻

日本と内モンゴルにおける常識・習慣の

違いについて

とりわけ「言葉の重み」の差異について

日本に留学する前、内モンゴルでとある仕事をしていました。その仕事ではさまざまな民族と接触することが多く「文化の違い」ということを頻繁に感じました。そして、しだいに「文化とはなんだろうか」という疑問が、自分のなかで大きくなりました。こうした問題を追求するため、日本への留学を決意しました。留学先に日本を選んだのは、モンゴルと同じアジアに位置しながら、四方を海に囲まれた独特な環境に興味を抱いたからです。

日本は稲作文化であり、内モンゴルは遊牧文化です。このことから二国の習慣、常識などが互いに大きく異なっています。日本に来た時に最初に戸惑ったのは挨拶に含まれる御礼の言葉でした。「御早う御座います」、「御疲れ様です」、「有難う御座います」など至るところで丁寧な言葉を耳にしました。あまりにも御礼の言葉が多いので「これは本当の気持ちなのだろうか」と思いました。

日本人と較べると、モンゴル人は感情を言葉で表すことが少ないです。もしかしたら、ゆったりとした遊牧生活を行ううえでは、多くの言葉が必要とされなかったのかもしれませんが、ともかくモンゴルの人びとは感情を心に留めておくような傾向に

あります。そのかわりに別の方法で人びとは感情を表現します。たとえば、モンゴル族の馬頭琴は郷愁の情を強く感じさせるような音色になっています。

日本には「郷に入っては郷に従え」ということわざがありますが、同様のことわざはモンゴルにもあります（「郷に入っては郷の歌を歌え」）。私は日本の生活に一日も早く馴染むためにずっとこの言葉を胸に刻んできました。

日本に来て、しばらくしてから、結婚式場の会場サービスのアルバイトをするようになりました。そのとき、ある人が新郎新婦に次の言葉を送るのを耳にしました。「相手への思いは必ず言葉にしなさい。そうしないと思いは伝わらないから」。この言葉を聞き、自分の思いを相手に伝えるための、最良の方法が言葉であることに気づきました。

来日当時、日本人の挨拶やお礼の言葉を聞き「本当の気持ちかな」と感じていた疑問が、このとき鮮やかに氷解しました。そして一言の言葉が「人の心を傷つけずれば温めもする」ということに気づきました。

留学生生活を終えて社会にでたら沢山の人と出会うはずですが、わたしはそこで相手の心を温めるような言葉を言えるようになりたいと願います。このようなことに気づいたことが、日本留学から得られた最大の財産であると思います。



羅 靖 (奨学生)

中国・江西省

千葉大学工学研究科 建築・都市科学専攻

日本と私の母国との違いについて

日本に来てから7年間が過ぎました。この7年間は私の人生にとっては、短い時間とは言えません。私の自身の生活習慣から、人生に対する態度まで、この7年間の経歴によって大きく変わりました。もちろん、日本の事情もたくさん理解ができるようになってきました。

最初日本に来た時、この国の静かな、整然とした、また冷静な雰囲気にもうまれている風景に感動しました。「なぜ、日本の環境はこんなに整然としているのですか？」という質問はずっと私の頭の中に残っています。この7年間のうち、私の質問に関して、日本人の友だちに尋ねたこともあり、他の国からの方と議論したこともありましたが、それはすべて他人の考え方ですので、私自身が理解しないと、どうしても自分の知恵にすることができません。

昨年、日本で非常に大変な自然災害が起きました。巨大な地震で起きた大津波がたくさんの家を壊し、命を奪いました。悲惨な災難の前に、日本人が表現した冷静な態度は世界の方々を感動



させたと思います。この冷静さに表わされた精神は、私がずっと感じている整然さと完全に同じものではないでしょうか。地震後、震災地以外の地域に住んでいる外国人は様々な噂の影響で、自分の仕事や学業などをあきらめて、日本から帰国しました。地震から今まで、ずっと日本にいる私の目から、日本人が災難の前に表現した勇敢、冷静、楽観的な態度を私の目でよく見ることができました。地震の影響で、電車が運行停止になっても、人々は冷静に駅の前に順番で並んでいました。スーパーの商品の入荷が地震の影響で品薄になっても、住民たちは出来る限り食料などの量を控えました。会社で働いている職員たちは節電のため、酷暑を我慢しながら、仕事を続けていました。

いろいろな素晴らしい行動が生まれたことに、私は非常に感動させられました。日本人のこのような冷静さは、自分の国に対する使命、家族に対する約束、仕事に対する責任だと感じております。留学に来ている私たちは日本の知識を勉強する以外にも、このような精神を学ぶことができれば、日本からいただいたもう一つの知恵となるのではないのでしょうか。

崔 雪寧 (奨学生)

中国・内モンゴル

千葉大学園芸研究科 環境園芸専攻

日中文化の違いから生じた— “ちょっと面白い話”

いつの間にか、日本に来てすでに七年が経った、時の流れを感じる。

日本と中国は「一衣帯水」の隣国でありながら、違うところがたくさんある。

例えば、「住」については、中国の家が、蜂の巣のように、同じような大きさの部屋をつぎつぎに作り出していくのに対して、日本の住いは、まるで風船をふくらますように、一室のままで家そのものを限りなく拡大させるのである。

「食」というと、これはまた大きな違いがある。

日本人は、ご飯を食べる前に「いただきます」と言い、食べ終わる時に「ごちそうさまでした」と言う。中国では、これらの言葉を言わない。また、ラーメンを食べる時に、中国では、音を立てて食べると行儀が悪いと思われるのに対し、日本では、逆に音を立てれば立てるほど、おいしくいただいていると思われる。それから、中国では、果物の梨は絶対に切って食べないということがある。なぜかと言うと、中国では梨を切るという動作は漢字で書くと「分梨」と書き、中国語で「別れ」を意味する言葉との読み方がまったく一緒であるため、切って食べると縁起が悪いと言われる。

また、日本にきて間もないときの話であるが、学校の日本人の先輩にラーメン屋さんでランチをご馳走になった時、それに、また大きなショックを受けた。なんと、その日のご馳走はと言うと“餃子定食”だった…。中国では、餃子とご飯のどちらも炭水化物の主食であって、この主食と主食のコンビは中国では絶対に許



されない。でも、どうやら、日本人にとっては、焼き餃子がただのおかずであるらしい…。日本で生活するにつれだぶん慣れたので、今では、ラーメンと餃子の定食ならおいしくいただけるが、餃子とご飯の定食は、あわなくはないが、合わせたくない自分がある。このような、国の食文化の違いから生じたちょっと面白い話がまだまだたくさんあると思う。

例えば、中国とはまったく関係のない話であるが、アメリカの食文化として始めて日本に入ってきたのはステーキである、しかし、このステーキがあまりにも大きくて、当時は食べにくいとのことで、なかなか日本人には受け入れられなかった。そこで、日本人の口に合わせて作ったのが今のサイコロステーキだったようである。また、誰もが知っているアメリカのアイスクリームの会社ハーゲンダッツでは、日本のマーケットに進出する際、抹茶味のアイスクリームは当初アメリカではなかったが、そこで、“餃子定食”のように異国の食文化をうまく取り上げて、生み出したのが今の抹茶味のアイスクリームである。

国による、このような食文化の違いを十分に生かし、さまざまなアイディア商品が作りあげられていることが、私にとってとても魅力的である。

私の専門は食料経済資源である。このようなアイディア商品こそ、これから厳しい日本と中国の食産業を活性化する秘訣ではないかと考えており、これから、これらのアイディア商品の企画を今後の研究課題にし、積極的に企業に出向いてヒアリングを行い、日本人と中国人、また、世界の人々から愛される商品を作りあげられるように努力したい。